

鳥 越 古 墳 群

現 状 調 査 報 告 書

福岡大学歴史研究部
考 古 学 班

1977年

序 文

油山群集墳は、福岡大学歴史研究部考古学班が、昭和46年より分布調査、研究を重ねてきたものです。今回の鳥越古墳群は49年12月より調査を開始したものです。

近年地域開発に伴う土木工事等が著しく増加し、多くの文化財が破壊の危機にさらされており、当油山においても数多くの古墳が破壊されました。更にこの傾向は強まる一方であります。我々考古学班では、今回のような現状調査を行ない、文化財の保護を呼びかける活動をしております。この報告書が研究の、また文化財に対する認識と理解の一資料として御活用いただけますならば望外の幸と存じます。

末筆ではありますが、今回の調査にあたり暖かい御協力、御理解を賜わりました土地所有者の方々、御支援をいただきましたOB、諸先輩の方々に深く感謝の意を表します。

福岡大学歴史研究部考古学班

本文目次

序 文

第1章	調 査 の 経 過	1
第2章	古墳群の立地と環境（第1～3図）	2
第3章	調 査 の 記 録	5
	1. 鳥越1号墳（第4図）	5
	2. 鳥越2号墳（第5図）	7
	3. 鳥越3号墳（第6図）	7
	4. 鳥越4号墳	9
	5. 鳥越5号墳（第7図）	9
	6. 鳥越6号墳（第8図）	11
	7. 鳥越7号墳	11
	8. 鳥越8号墳	12
	9. 鳥越9号墳	12
	10. 鳥越10号墳（第9図）	13
	11. 鳥越11号墳	13
	12. 鳥越12号墳	14
	13. 鳥越13号墳（第10図）	14
第4章	後 論	16

挿 図 目 次

第1図	鳥越古墳群と周辺の遺跡	3
第2図	鳥越古墳群位置図（縮尺 1 / 2500）	4
第3図	鳥越古墳群地形図（縮尺 1 / 400）	5
第4図	鳥越1号墳石室実測図（縮尺 1 / 40）	7
第5図	鳥越2号墳石室実測図（縮尺 1 / 40）	7
第6図	鳥越3号墳石室実測図（縮尺 1 / 40）	8
第7図	鳥越5号墳石室実測図（縮尺 1 / 40）	11

第8図	鳥越6号墳石室実測図（縮尺 1 / 40）	11
第9図	鳥越10号墳石室実測図（縮尺 1 / 40）	13
第10図	鳥越13号墳石室実測図（縮尺 1 / 40）	15

図 版 目 次

1.	遠景〔油山（片江展望台）より鳥越古墳群を望む〕	17
2.	1号墳〔前室より後室を望む〕	18
3.	1号墳〔後室より前室を望む〕	18
4.	2号墳〔南東側より玄室を望む〕	18
5.	3号墳〔東側より石室を望む〕	18
6.	4号墳〔北側より全景を望む〕	19
7.	5号墳〔南東側より玄室入口を望む〕	19
8.	5号墳〔前室より後室を望む〕	19
9.	5号墳〔後室の敷石攪乱状態（後室左隅）〕	19
10.	6号墳〔南側正面より玄室を望む〕	20
11.	7号墳〔南側より玄室を望む〕	20
12.	8号墳〔南側より玄室を望む〕	20
13.	9号墳〔北側より玄室を望む〕	20
14.	10号墳〔南側より玄室を望む〕	21
15.	11号墳〔南東側より全景〕	21
16.	12号墳〔南東側より玄室奥壁を望む〕	21
17.	13号墳〔玄門より玄室を望む〕	21

第 1 章 調 査 の 経 過

I. 調査に至るまで

昭和50年度、福岡大学歴史研究部考古学班々活動として油山群集墳の東部に位置する鳥越古墳群の現状調査が決定された。

この調査の動機は、我部も、また市教育委員会も未踏査地区で遺跡台帳にも記載されておらず、さらに開発の手が伸びその存続があやぶまれていたことなのである。

II. 調査参加者

本調査は51年度考古学班員で行なった。

班員

川原宏子、津波古勝信、長野徹郎、西尾真一郎、友清淑子、柏原 渉、樋口満朗、森山栄治、植村敏文、越智敏雄、近藤純子、平田文子、鈴木欣也、宮原 卓、赤川正秀、松風 満、森山雅博、山之内悦子、吉岡智恵子、河井章、山口晴夫、中川原裕之、江口政徳、大庭孝幸、山崎栄二

III. 調 査 経 過

昭和49年12月から約1ヶ月間 鳥越地区を踏査したところ、複式石室墳2基、単式石室墳8基、地形や残存状態より墳墓と識別できるもの3基、計13基を発見確認した。また翌年4月には位置関係の把握を完了した。

5月からは13基のうち土砂流入の比較的少ない1号墳、5号墳、6号墳、10号墳、13号墳を選び、その現状実測を試みた。初めての経験で水糸張りから手間取り、また放課後の短い時間のためなかなか実測が進行しなかった。並行して墳丘実測班を構成し平板による地形実測を行なったが、大幅な伐採ができないためレベルの通りが悪く困難をきわめ、また未熟さも手伝ってこちらも進行が遅れた。10月には実測がほぼ終了し、説明文を加え七隈祭において発表した。しかし反省として鳥越古墳群全体の把握に疑問が残り、未実測墳である8基の形態の把握がなされなかった。

昭和51年度の活動として前年度の反省を生かし、本報告書刊行を決定した。未実測墳8基の実測及び未熟さなどによりその正確さに欠ける墳丘実測図の作製を50年12月より開始したが、未完のまま年を越し完成に至らなかった。

4月に検討を重ね短期的に完成をめざし、再度夏休みを利用して製図及び各墳の検討を行なった。今回の調査では各人の技術的向上を見、短期間でほぼ完成の域に達した。

51年度の七隈祭においては鳥越古墳群のささやかな考察を挙げ、発掘され報告書が出ている大谷古墳群、倉瀬戸、駄ノ原古墳群、片江古墳群との比較を試み、本古墳群の位置づけを発表した。

第 2 章 古墳群の立地と環境

背振山塊の派生支脈である油山（標高 592 *m*）は福岡市の西郊にそびえ、北麓はいくつもの舌状台地を派生させ福岡平野と早良平野を二分する。

鳥越古墳群は福岡市西区大字片江に所在し、福岡平野の西南部、油山の東側山麓部に位置している。油山山麓部には小古墳が群集し群集墳を形成しているが、鳥越古墳群もその中の一つである。

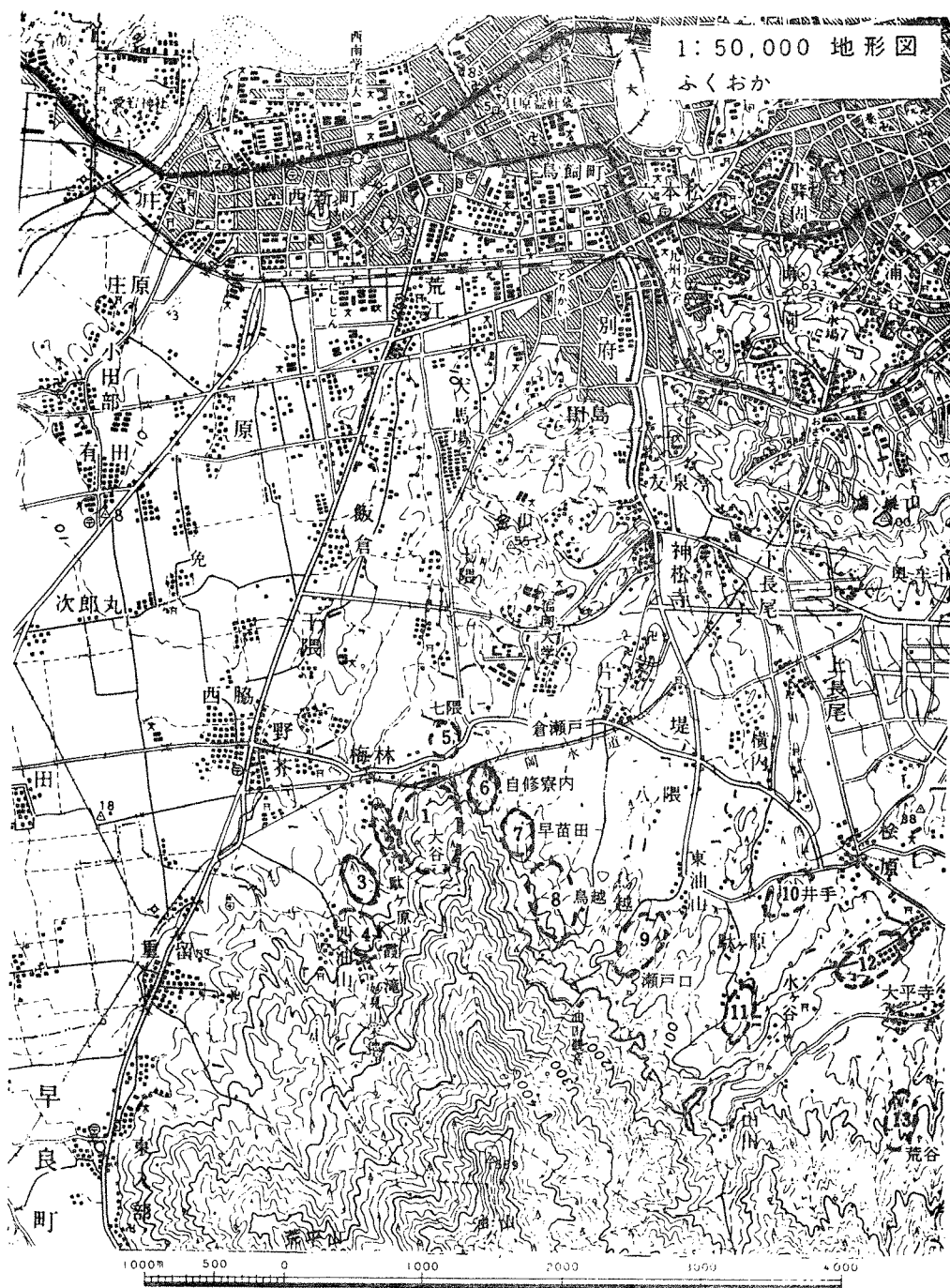
油山群集墳の垂直分布は標高 30～170 *m* の範囲におさまる。山崎、西油山、霧ヶ滝、駄ノ原、大谷、七隈、倉瀬戸、片江、鳥越、瀬戸口古墳群などが山麓を西から東へめぐっており、一大群集墳を形成している。

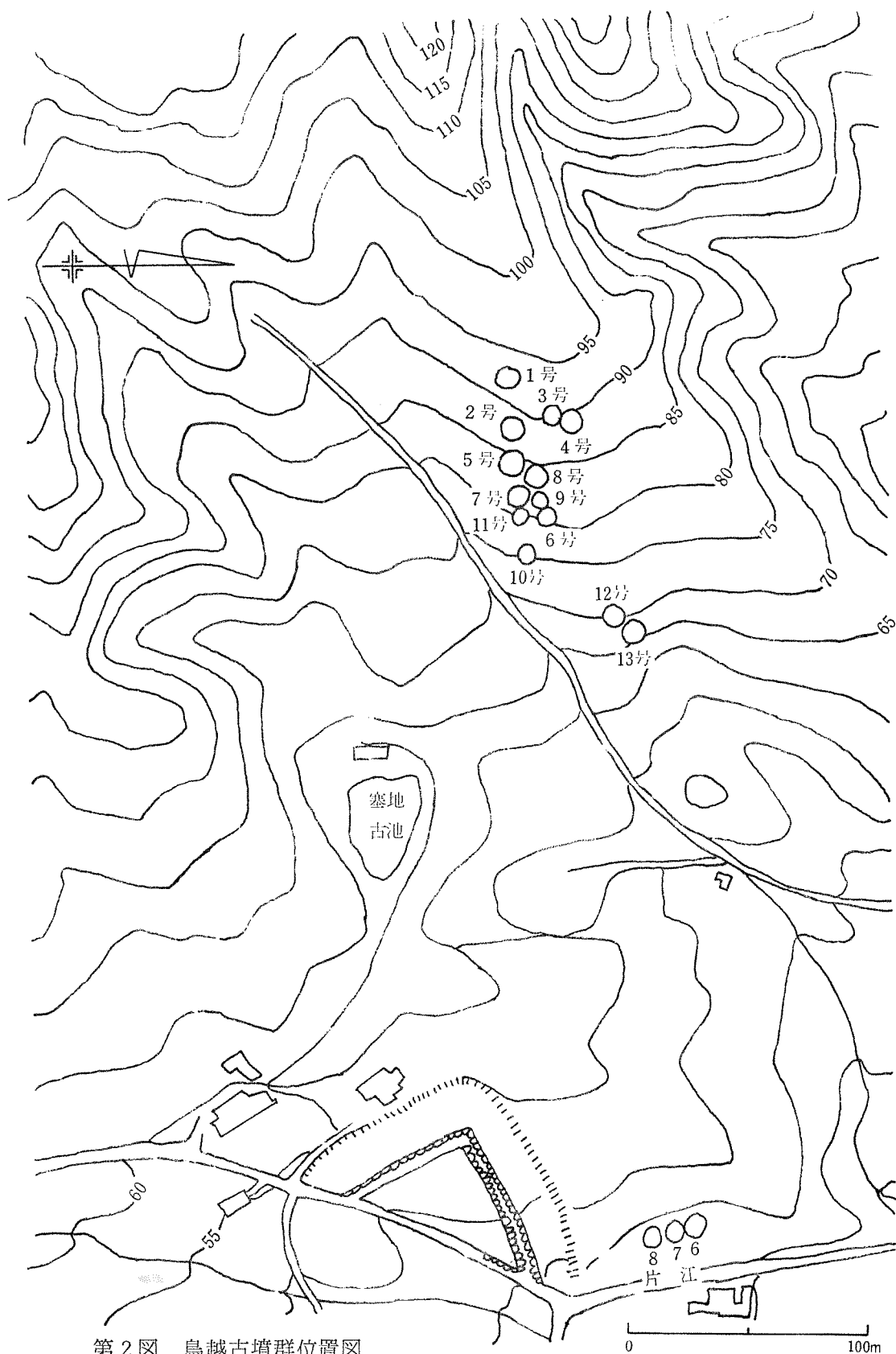
片江川の上流域には油山山麓からのびた丘陵が川に平行して南へつづいている。鳥越古墳群は片江川の西側丘陵に位置しており、東には片江 6、7、8 号墳、北には 2、3、4 号墳が隣接している。油山から北東にのびた丘陵鞍部は、北へ急な、南へゆるやかな斜面をもち、古墳全部が南斜面で、標高 65*m*～93*m* の間に 13 基が分布している。1 号墳から 11 号墳（距離的にいえば 10 号墳）の間は、距離的に近く隣接している。また 12 号墳と 13 号墳は隣接しているが、最も近い 10 号墳からでさえ北東へ約 50*m* の距離をもっている。従って、1 号墳～11 号墳を上部、12、13 号墳を下部とする。

上部は標高 75*m* から 93.5*m* の間に分布している。1 号墳は当古墳群中最高所、最西端に位置し、2 号墳と墳頂間で 24*m* 離れている。3 号墳は 2 号墳と 4 号墳のほぼ中間に位置し、4 号墳は 3 号墳とほぼ同一標高に立地している。5 号墳は上部のほぼ中央に位置し、1 号墳と共に墳丘径 10*m* 以上を呈している。また 5 号墳を囲むように 2 号、3 号、4 号、7 号、8 号、9 号墳が立地している。6 号墳は標高 81*m* に位置し、標高において当古墳群のほぼ中間になる。10 号墳は上部において標高 76*m* と最も低く、東端に位置している。

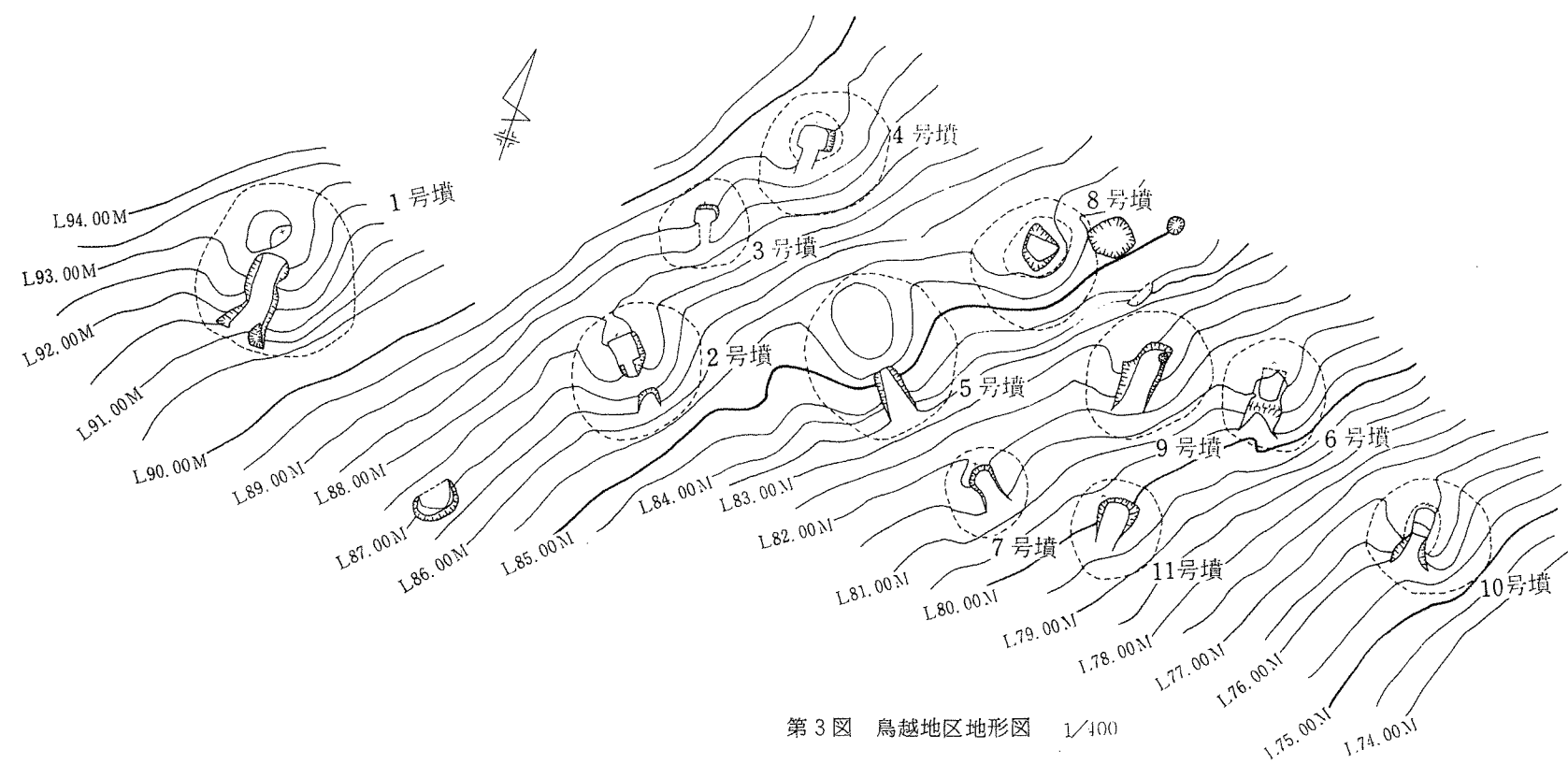
下部は標高 66*m* から 71.5*m* の間に分布している。12 号墳は標高 70*m* に位置し、東側下方に 13 号墳が隣接している。13 号墳はこの古墳群の最東端最下部（標高 67.5*m*）に立地している。

第1図 鳥越古墳群と周辺の遺跡

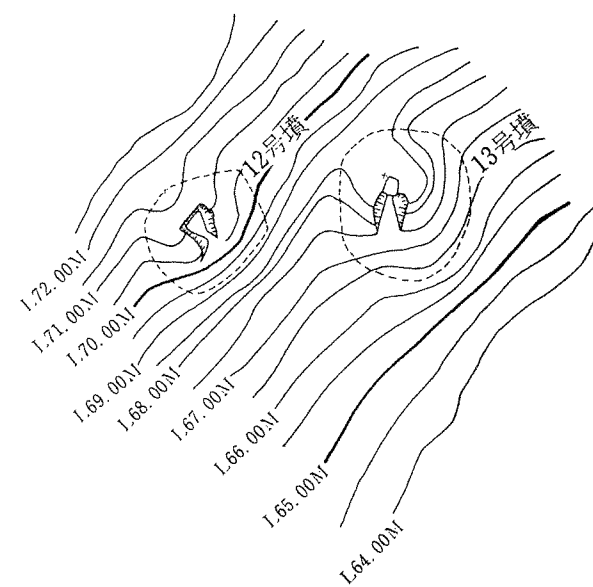




第2図 鳥越古墳群位置図



第3図 鳥越地区地形図 1/400



第 3 章 調 査 の 記 録

1. 1 号 墳

本墳は鳥越古墳群において最高所・最西端に位置し、その東に位置する 2 号墳とは、墳頂部において約 24m と、かなりの距離を測る。

墳 丘

この古墳は、傾斜角 14° の斜面にはりつくように盛りあげられている。墳丘裾の高さは、南側と北側とでは 2.3 m の差があり、墳丘封土は墳頂部において後室天井石が亀の甲状に露出する程度流出しており、前室においては天井石、側壁上部の石材がなくなっており、土砂流入は前室から後室にまで及び、羨道は埋没し窪みができている。このように封土が流れているためしっかりした墳丘裾線は認めにくい、一応南側で標高 90.25 m の等高線を墳裾と想定した。墳丘実測でこの裾線をもとに墳丘径を求めると、主体部主軸線で 11.2 m、主軸と直角の径は 9.0 m と主軸方向に長く尾を引く橢円形を呈する。

石 室

全長 7.70 m で、主軸を S にとり、おおよそ南に開口する両袖複式の横穴式石室を内部主体とする。

周壁は、比較的大きな花崗岩割石を立てて後室の基礎を造り、その上に割石を平積みに重ねて築かれ、現床面より 1 m 程から持ち送りとなっている。築造状態は、大きさの整った石材が使用されており、天井石も一枚石であり、わりと良い方である。

持ち送りの場合は、平積周壁の随所に割石細片をはきんで石室崩壊の危険性をなくするのが普通だが、本墳では若干の持ち送りしかみられず、奥壁上部の左側の栗石が少し目立ち、右側には力石が認められる。奥壁、右側壁は平面的に積みあげられているのに対し、左側壁は不揃いであり、せり出しが生じているものと思われる。左袖石には特に加工の跡が顕著にみられる。後室の平面プランは、最大幅 1.86 m、長さ 1.64 m のほぼ正方形プランを呈す。現床面には敷石の一部と思われる川原石、割石細片が数個存在し、ボーリング棒によっても現床面下に敷石は認められず、また腰石下辺が確認でき、現床面付近が床面であろう。後室の高さは現床面より天井石まで 1.85 m を測り、床面と天井面の比は約 5 対 2 である。

一方、前室は天井石、側壁上部の石材がすでになく破壊が著しい。土砂の流入で原形は分らないが、現状で最大幅 1.98 m、長さ 1.34 m と横長の長方形プランである。また左袖石は現存しているが、右袖石はみあたらない。尚、右側壁よりに横転している 2 個の石材はどのような性質のものなのか、後室側の転落石は側壁上部のもの、羨道側の転落石は右袖石と考えられなくもないが判明しがたい。また、転落石の後部より石材が認められるが性質については不明である。

羨道はすっかり埋没しており、石材はみあたらないが、前室左袖石の存在と列石のはじまりの部分、また羨道の墳丘裾部の石材の抜き跡、また墳丘の窪みの具合などにより、幅0.94m、長さ3.60m程度と思われる。羨道中央よりやや前室側より若干の土の盛り上がりが見られるが、ボーリング棒により石材が確認でき閉塞石の残存しているものと考えられる。

列 石

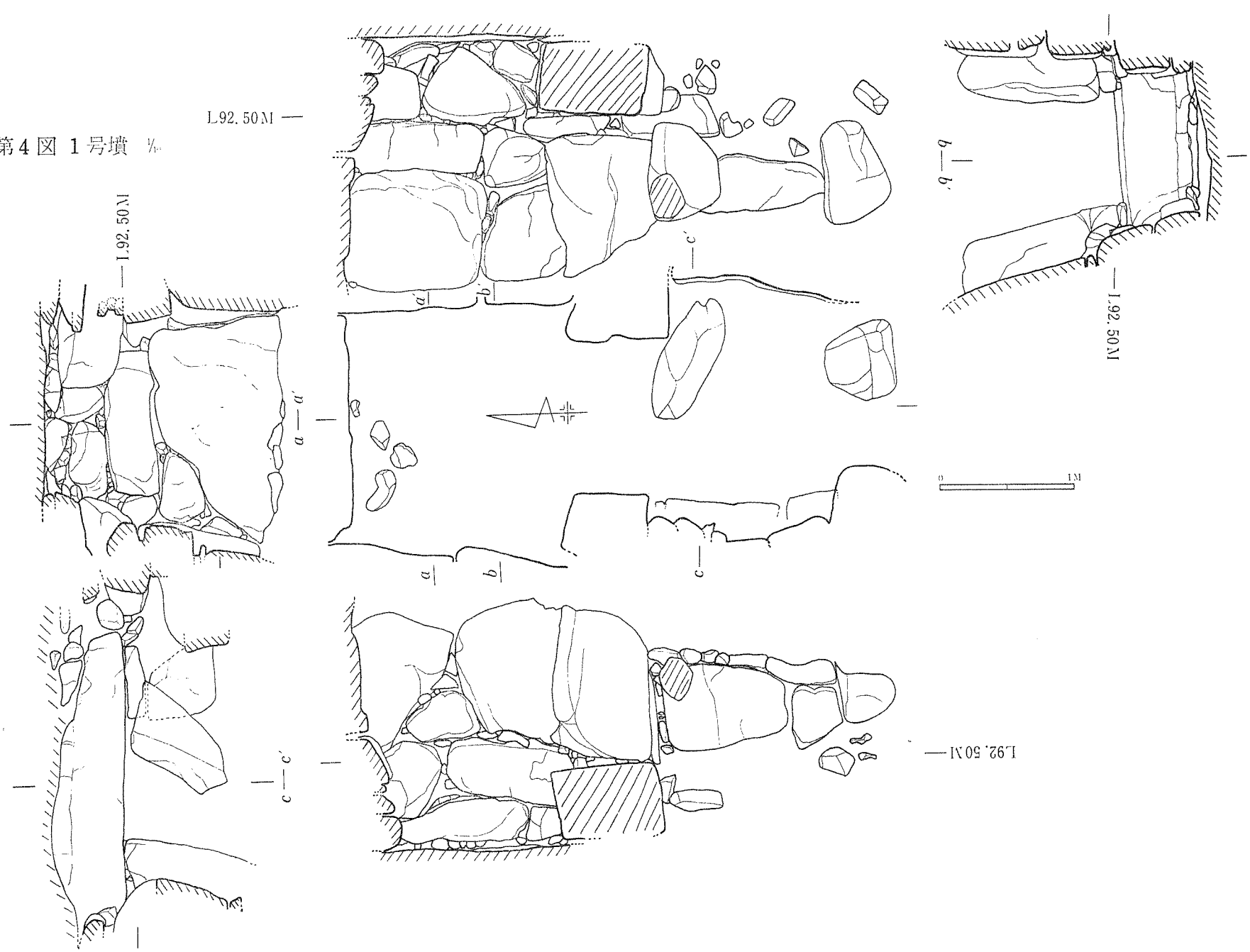
羨門付近の左右に3～4の石材が表出し石抜きの跡があり、ボーリング棒を挿入してみると、続いて石材が確認されるので、列石がまわっているものと考えられる。

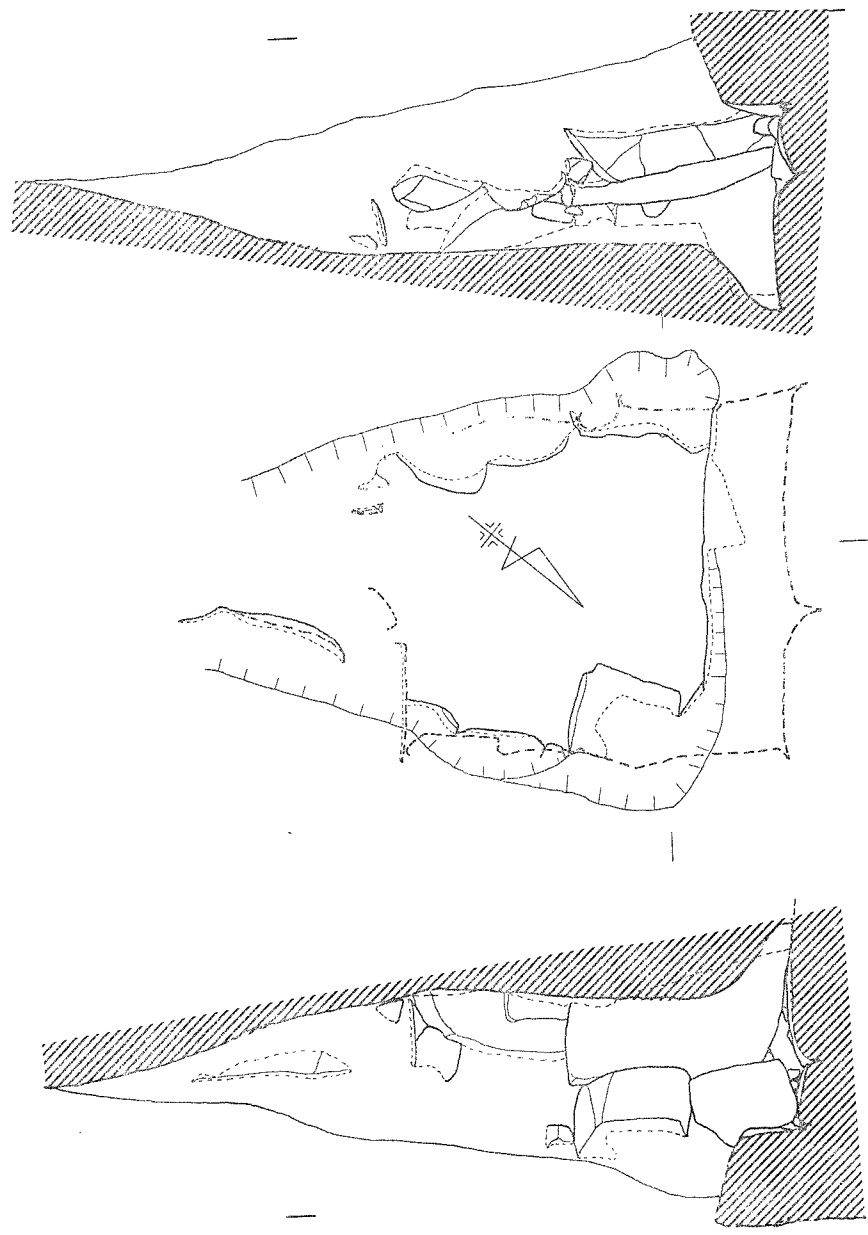
遺 物

左前庭部から須恵器片が数片表採されているが、年代編年は判定が困難である。

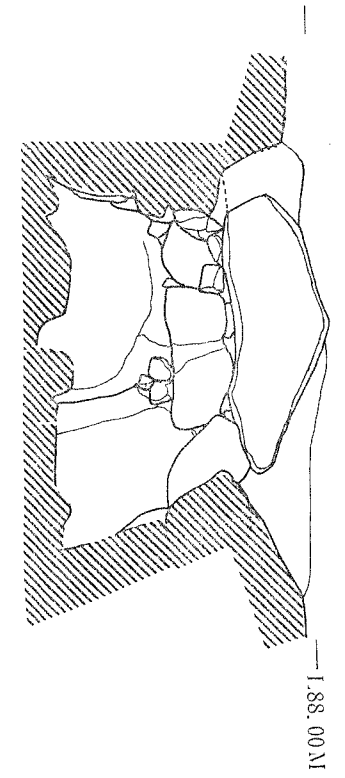
(樋口満朗)

第4図 1号墳 Ⅱ

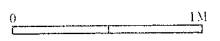




—1.88.00M



—1.88.00M



第5図 2号墳 1/50
—1.88.00M

2. 2 号 墳

2号墳は傾斜角15度、標高約85m～88mの斜面上にあり、開口方向はほぼ等高線に直交する。

墳 丘

本墳の墳丘封土は、石室の崩壊及び陥没に伴いかなり流出したと思われる。従って、しっかりした墳丘裾線は認めにくい。が、南側の標高85.5mの等高線を裾線と想定すると、墳丘径は主体部主軸方向に8.3m、主軸と直向する方向に9mとなりその形状はほぼ円形を呈する。

石 室

主体部は、主軸をS40°Eにとり、ほぼ南東に開口する全長約4.5mの両袖単式の横穴式石室である。

玄室、羨道共に天井部の石材はすでになく、またそれらによって生じる周壁の転落、石室内への土砂流入などにより、床面と現床面との差がかなりあると思われる。従って、この状態でプランを出すのははなはだ危険であるが、現状では奥壁幅1.90m、右側壁長2.16m、左側壁長2.08m、前幅は17.2mを測り、不整な縦長の長方形プランを呈している。

奥壁の腰石はおおぶりの自然石2個を並列しており、その上部二段の石材は平積みであり、奥壁の随所に栗石の使用がみられる。また、三段目の持ち送りは顕著である。右側壁も腰石におおぶりの自然石2個を横位に配して、二段残っておりその二段目は今にも落ちそうである。奥壁側には力石の使用がみられる。左側壁では土砂流入の為、腰石は1個しか確認できない。腰石から三段の石材が残っており、二段目は長さ1.08m、厚さ約0.18m、三段目は長さ約1.10m、厚さ0.20mという偏平な割石が使用され、力石の役目もしていると思われる。

羨道部はほとんど埋没しており、その規模を求めることは困難であるが、表出するわずかな石材等から玄門幅約0.50m、羨門幅約1.1m、羨道長約2.4mと推定される。また、羨道中央部の土の盛り上りは閉塞石が残存していると思われる。

(赤川正秀)

3. 3 号 墳

3号墳は標高約87.5mで2号墳より北東11m、4号墳より西南に9mに位置し、両墳のほぼ中間に立地している。

墳 丘

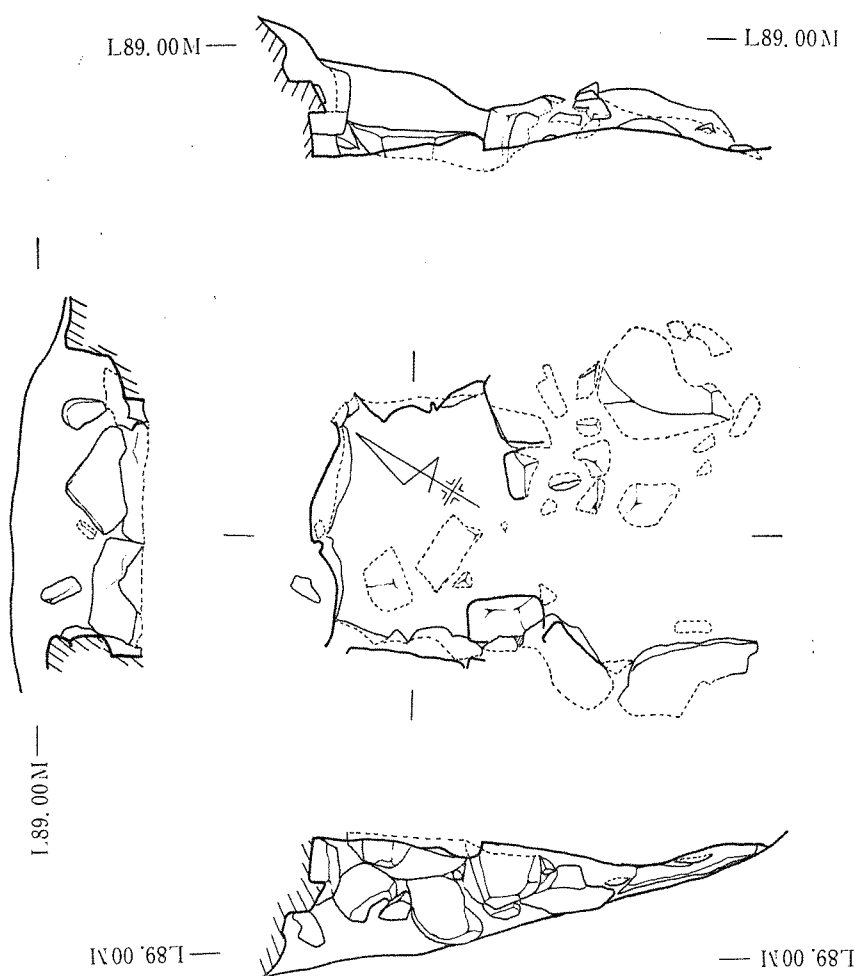
墳丘の封土はかなり流れたと思われるが、古墳のそれとは確認できる。墳丘裾の高さは北側と南側とでは1.75mの差があり、裾線も封土の流出のため、築造当時との相違はあろうが、およそ円墳と確認できる。

石 室

主軸方向をS24°Eにとる両袖単式の横穴式石室を内部主体としている。石室の天井石はすでになくなっており、周壁の転落、土砂の流入が激しく平面プランをだすのは危険であるが、現状では横長の長方形プランである(1.30m×1.05m)。

石材は小ぶりの自然石を用いており、現床面より奥壁、左側壁が二段、右側壁が一段確認できるが、その上に数段、また現床面の下に腰石があると思われる。それゆえ現状では小規模の石室と思われるが、断定はできない。

羨道部も土砂流入が著しく、確たることは分らない状態であるが、閉塞石らしいものが確認できる。
(樋口満朗)



第6図 3号墳 1/10 0 1M

4. 4 号 墳

4 号墳は標高約95mの斜面上に立地する円墳である。南西に3号墳と近接し、開口方向は等高線に斜交する。

墳 丘

墳丘径は南北8.25m、東西8.00mを測り、円形を呈し列石は認められない。墳頂部の封土は天井石および周壁の崩壊に伴い陥没しており、全く失なわれている。

石 室

主体部は主軸をS 6°Wにとり、ほぼ南に開口する全長約6.7mの両袖単式の横穴式石室であろう。

玄室部は土砂流入が激しく腰石がすでに埋没しており、現在露出している部分は2～3段目の石材と思われる。現床面には周壁からの転落石等が散在し埋没している。

床面と現床面との差が激しいためプランを求めるのは困難であるが、現状では奥壁幅1.69m、右側壁長1.51m、左側壁長1.47m、前幅1.68mを測る正方形プランを呈している。

石材は油山に多数存在している花崗岩の自然石を使用している。

右側壁は左側壁に比べ石材が明確でなく、土砂に覆われている。

羨道は天井石がすでになく、石材も上部の一部がわずかに見られる程度である。羨道の幅は約1.03mと広く、羨門部に向ってやや「ハ」の字形に広がっている。(柏原 渉)

5. 5 号 墳

5号墳は鳥越古墳群上部(1号から11号)のほぼ中央に位置する両袖複式の石室を有する円墳である。規模としては、墳丘、石室共に当古墳群中最大であり、並びに羨道部の崩壊を除けばほぼ完全に原型を留めているものと思われる。主体部は、等高線と直交する南々東へ開口している。

墳 丘

封土は標高84mの斜面に盛り土されており、墳丘の径は主体部主軸線で11.2m、主軸と直角の径は10.2mであり、主軸に沿って南側で墳頂と墳裾の比高が3.0m、北側で0.2mである。

墳頂部において後室天井石の一部と思われる石材の一角が露呈し、南側墳裾が斜面下方に向かって若干尾を引いているものの、大幅な流出によるものではなく、ほぼ原型を留めているものとみて差しつかえなからう。

石 室

本墳の主体部は、主軸をS38°Eにとる両袖複式の横穴式石室である。

玄室はほぼ原型を保っているが、羨道は天井石が流出し埋没している。

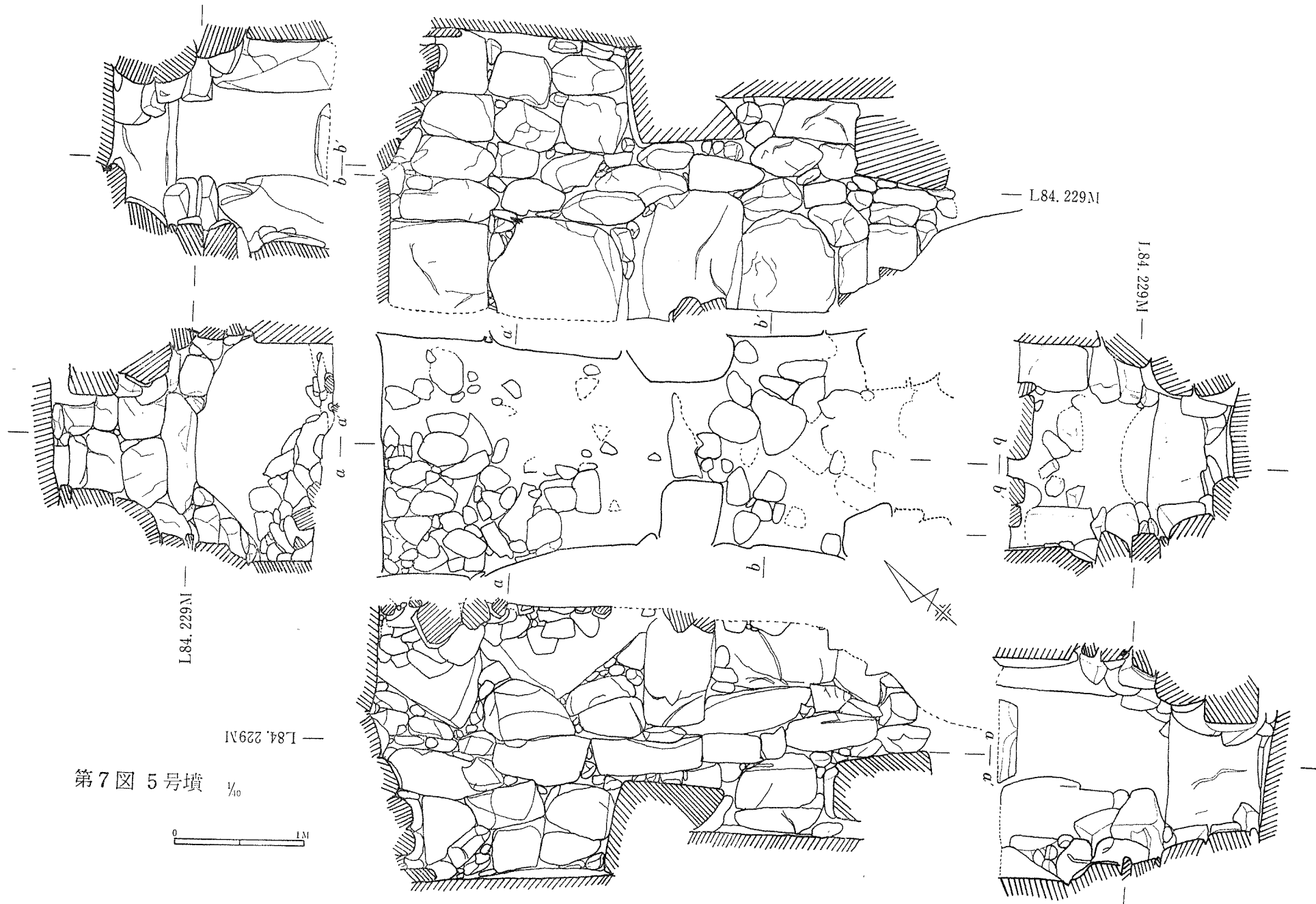
玄門の楣石と埋没した羨道との間に高さ30cmほどの空間ができ、そこより玄室をうかがうことができる。玄室は前室中央まで羨道より土砂が流入しているが、他の床面は原状に近いものと思われる。また敷石が散積され前室にも同様の石材がみられる。

玄室の規模は全長3.74mを測り、後室は奥壁幅1.89m、前幅1.34m、長さ2.16mと奥壁に向かって開く縦長の台形状のプランであり、前室は中央部において縦と横が1.06m×1.64mの横長の長方形プランである。また、後室と前室の中央において床面より天井石までの高さは、それぞれ2.15mと1.64mである。

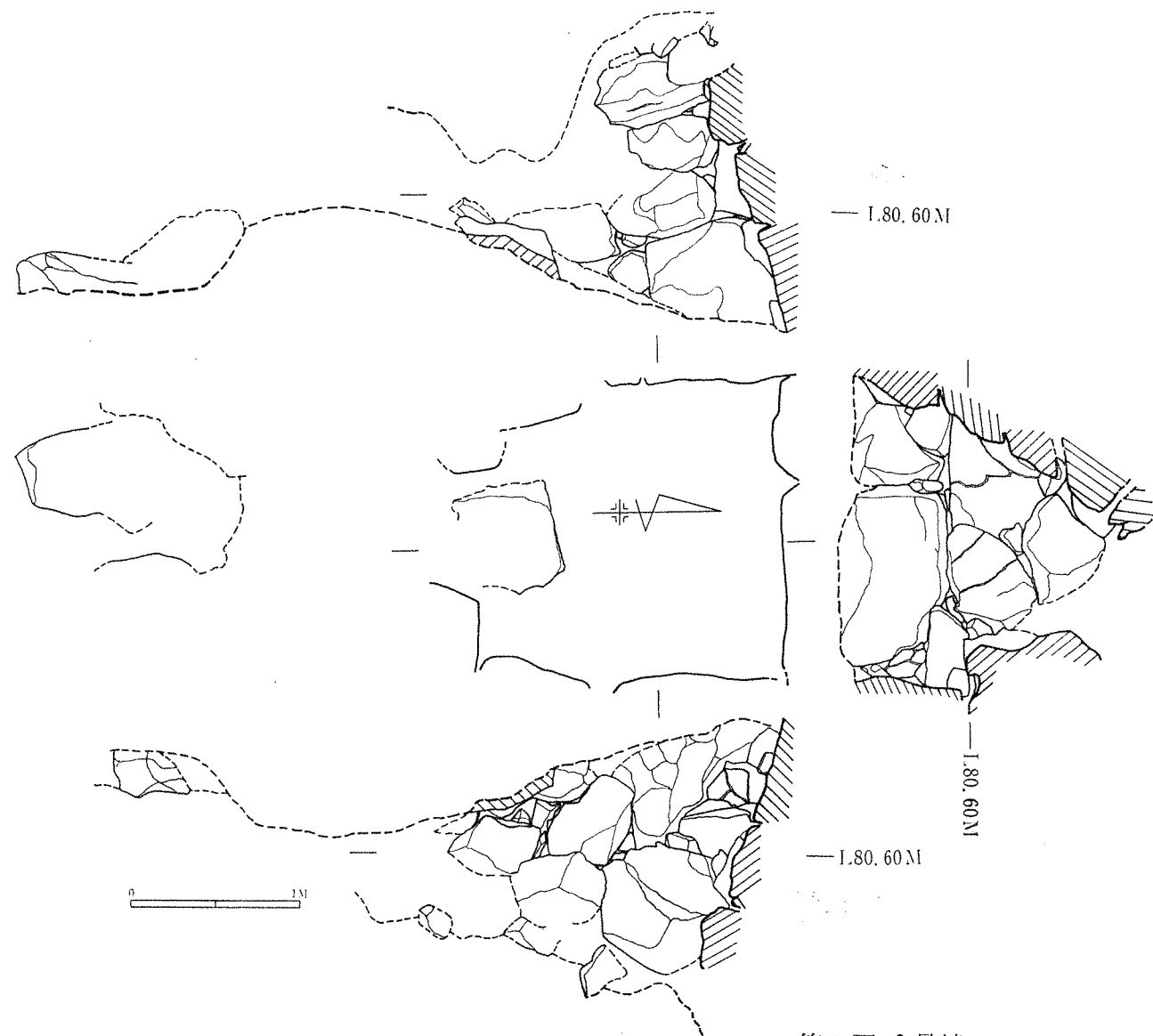
構築状態は後室周壁において各5段構築で、奥壁腰石1枚、左右両壁にそれぞれ2枚の大ぶりの割石を縦に配し、2段目以上は平積みにより持ち送りをういて築かれている。また前室の両側壁は4段に構築されており、腰石は後室のものと同等の大きさである。袖石は各々大きさはまちまちであるが、腰石の高さと同じくらいの高さに立てられている。玄門右袖石は特に形が整っているのが目につく。天井石は後室、前室共に1枚の大石であり、楣石の規模の大きさも目立つ。後室と前室に散積している敷石は人頭大の自然石である。

本墳では持ち送りが非常に顕著であり、後室においては力石の効用が目立ち、中央で床面の横幅が1.68mであるのに対し天井では0.69mにまで狭まっている。また、右側壁の奥壁側に見られるようないわゆる重箱積みのな築造が感じられる箇所がある。しかしながら全体的に石室構築状態は粗雑であり、栗石の使用が目立つ。それにもかかわらず、せり出しもなく玄室が崩壊からまぬがれ得た箇所があるのは、天井石、楣石が持ち送られた周壁をバランスよく押えているからであろう。

前述したように、羨道は天井部が流出欠損し、下部は埋没している為にその規模を知るのは困難であるが、現状では玄門幅0.94mを測り、墳丘裾の主軸線両側に連なって露出する外護列石らしき石材までを仮に羨道とすれば3.76mほどの長さである。また、羨道の玄門寄りはずかに盛り上がっているが、閉塞石が残存しているものと思われる。(植村敏文)



第7图 5号墳



第8图 6号墳 1/10

6. 6 号 墳

本墳の標高は81.5mであり、標高において鳥越古墳群のほぼ中間に位置する。9号墳から南へ9.1m、10号墳の西北14m、11号墳の東北14.3mの所に立地する。

墳 丘

墳頂部から羨道にかけて天井石はすでになく、その部分の封土を失っているにもかかわらず、他は比較的良く保たれている。

傾斜角15°の斜面に築造されており、墳丘径は南北7.30m、東西7.00mを測る円墳である。開口方向が等高線に対して斜交するため、墳丘裾の標高は東側81.5m、西側80.5mと東西において差異が認められる。

石 室

石室全体に土砂流入が著しく、また左右両側壁からは石材も多数抜かれている状態である。全長約4.6mで、主軸をSにとる両袖単式の横穴式石室を内部主体とする。

玄室では床面のほとんどが土砂に覆われており、原床面の数値を出すことは困難である。現状での玄室のプランは右側壁長1.84m、左側壁長1.6m、奥壁幅1.8m、前幅1.37mで不整正方形を呈す。腰石は現状で奥壁2枚、両側壁1枚ずつを見ることができる。

石材の種類は花崗岩で、同程度の大きさの石を使用し、石の形に合わせて組んでいるため隙間がなく、栗石の使用が少ない。ただし、側壁では石抜きが激しいためか粗雑に感じる。石室構築技法には持ち送りが採用され、力石は奥壁・右側壁間では二段目に、奥壁・左側壁間では四段目に見られる。

羨道部はほとんど埋没しており、わずかに露呈している石材によってその規模をある程度は窺うことができるだけである。

(越智敏雄)

7. 7 号 墳

7号墳は標高約82mに位置し、5号墳の南方に立地している。現墳丘径は5.95mを測る円墳であり、墳丘の比高は1.20mでかなり流出したものと思われる。

石室は石材の抜き取り及び土砂の流入のためほとんど原形を保っていないので詳細ははっきりつかめない。

現状では、油山に散在する花崗岩を用いた南々東に開口する両袖単式の小規模な横穴式石室を内部主体とすると思われる、羨道に残存する石材は閉塞石と推定される。

(森山栄治)

8. 8 号 墳

8号墳は傾斜角 15.5° 、標高 $84.5m$ の斜面に立地している。

墳裾線は確めにくいが、南東側では標高 $84.2m$ の等高線を裾線と想定し、墳丘径を測ると主体部主軸方向に $8.6m$ 、主軸と直交する方向に $8.2m$ となり、ほぼ円形を呈している。

本墳の主体部は南々東に開口する単式の横穴式石室と思われる。石室においては天井石、周壁上部の石材がほとんどみられず、土砂が流入して埋没したものと思われる。

現床面から奥壁では一段の石材が、また石側壁にも石材がみられ、左側壁は二段の石積みが見られる。しかし袖石はみあたらない。従って、この状態でプランを出すのは不可能である。なお、石室中央にみられるやや大きめの石材は楣石ではないかと思われる。以上のように、外部、内部共に残存状態はあまりよくない。

墳丘裾の南東部に数個の石材が表出しており、列石と思われる。 (越智敏雄)

9. 9 号 墳

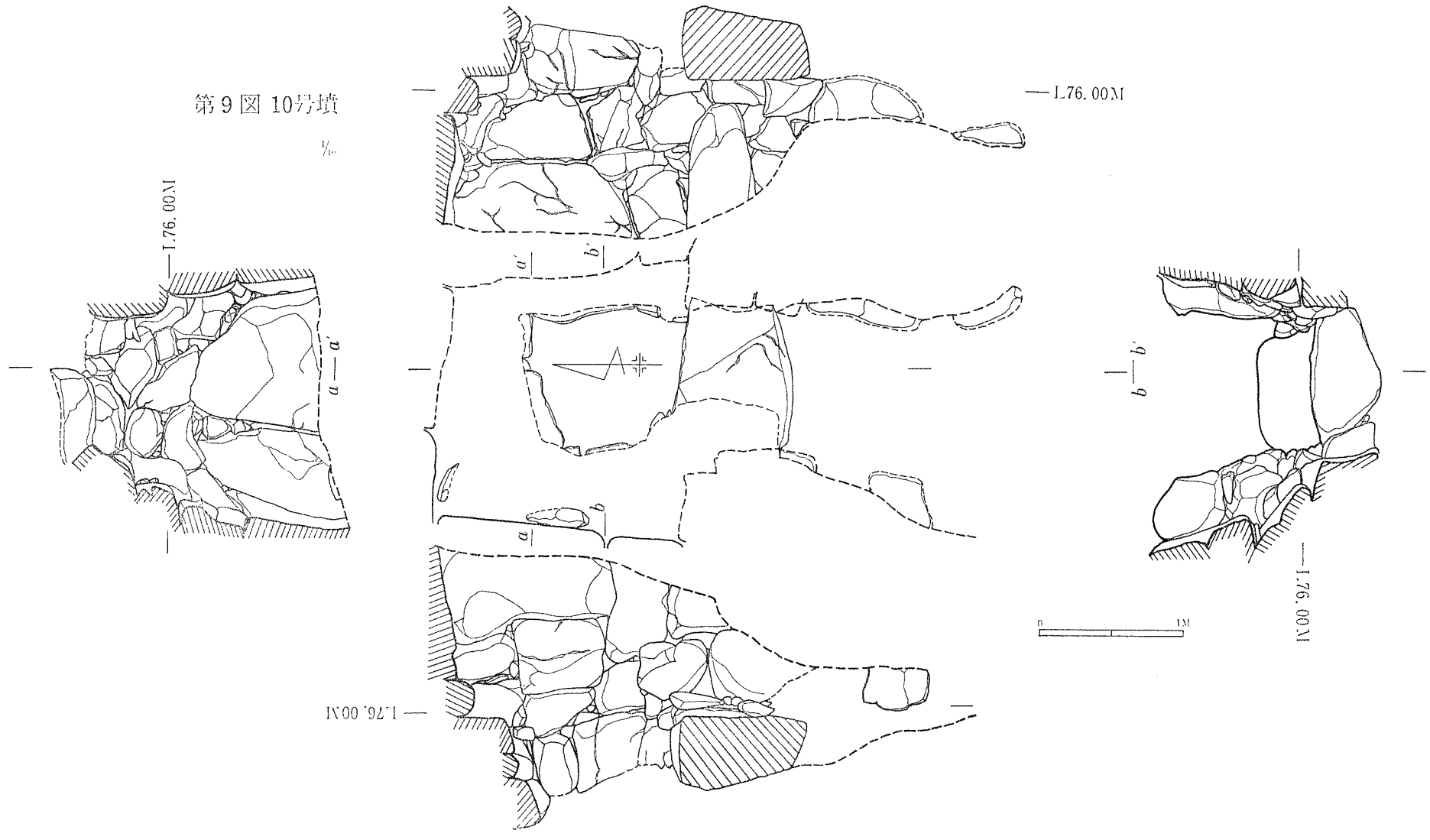
9号墳は標高約 $81.5m$ に位置し、北東に8号墳を見上げ、北西に6号墳、南に11号墳が接している。現状では石室の石材が抜かれているため凹地を呈しており、封土は流れている。

墳丘の規模は判然としないが、裾線は確認でき、直径 $8.5m$ 程度の円墳であろう。本墳も6号墳などと同様、主軸が等高線に斜交しているため墳丘裾の東側と西側の比高は $2.2m$ である。

石室は、石抜きのために確たることは言えないが、おおよそ南に開口する横穴式石室であろう。また、掘り込みに沿って土の盛り上がりが見られ、石材が埋まっていると思われる。

(樋口満朗)

第9図 10号墳



10. 10号墳

10号墳は、鳥越古墳群の上部において標高74.5mと最も低く、東端に位置する。

また下部の12、13号墳とは西南に約50m離れている。

墳 丘

墳丘径が東西 7.6 m、南北 7.7 m の円墳である。墳頂部の封土はなく、羨道部は陥没しており、墳丘東側の封土は流れている。しかしながら、当古墳群中では良好な部類に入る。

石 室

全長4.1mで、主軸をS10°Wにとる両袖単式の横穴式石室を内部主体とする。また、主軸は等高線に対して斜交している。

楣石をのぞく天井石はすでになく、床面床域に土砂が数cmから数10cm堆積しており、床面の施設は不明である。

玄室は、現状の長さが右側壁1.62m、左側壁1.72mで、幅が奥壁1.60m、玄門1.95mを測る正方形プランをなしている。周壁は、花崗岩の自然石を三段から五段積んでおり、その高さは約1.60mである。石材使用法は、奥壁の腰石二枚、左右両側壁、玄門よりの腰石一枚ずつと、右袖石が縦積みであり、他はほぼ横積みとなっている。また、袖石を縦に積んだと同じ高さにしている。構築技法には持ち送りが用いられて、奥壁と側壁の二段目、三段目の石材の角を交互にかみ合わせ、力石の役割をさせている。栗石の使用が多く、左側壁の三、四段目ではせり出しがあり、全体に石組みの粗雑さを感じる。

羨道は、羨門から約 1 m の間に土砂が約90cmも堆積しており、また左側壁上部では石抜きがされている。規模は、長さ約1.60m、幅0.96m、高さ1.10mであり、玄室幅に等しい羨道幅が広く感じる。

(越智敏雄)

11. 11号墳

11号墳は標高約79m、9号墳の南3mの斜面上に立地する円墳である。

墳丘はそのほとんどが失われ、一見して古墳とはわからない状態である。墳裾線ははっきりとしたものは認められないが、かろうじてその概形はつかめる。

石室は、周壁が全くなく現床面には石材が二個露呈し、転落石と思われる小石材が埋没している程度で、ほとんど原形を保っていない。また、開口はその掘り方により南と推測されるだけである。

以上のように11号墳は、当古墳群中最も破壊が進んでいる。

(柏原 渉)

12. 12号墳

12号墳はこの古墳群の下部標高69.0mにあり、上部の10号墳と約50mの距離をはかり、東側下方に13号墳が隣接しその墳頂間は12.6mである。

墳 丘

本墳は傾斜角22°の急斜面に立地し、墳丘裾の差が南北で約2.4mあり、そのことによって墳丘がかなり高くみえる。墳形は直径約7mの円墳である。

石 室

主軸がE 22° Sで、南東方向に開口する両袖単式の横穴式石室である。現状は天井石がすでに失なわれており、石室の崩壊、土砂流入により、上部の石材が一部見えるだけで他はほとんど埋没している。従って、石室プランを推測するのは困難である。(松風 満)

13. 13号墳

13号墳はこの古墳群の最東端、最下部に位置し、南に開口する単式両袖の横穴式石室を内部主体とする円墳である。現状は、羨道がほとんど損壊しているために玄室が大きく口を開いている。

墳 丘

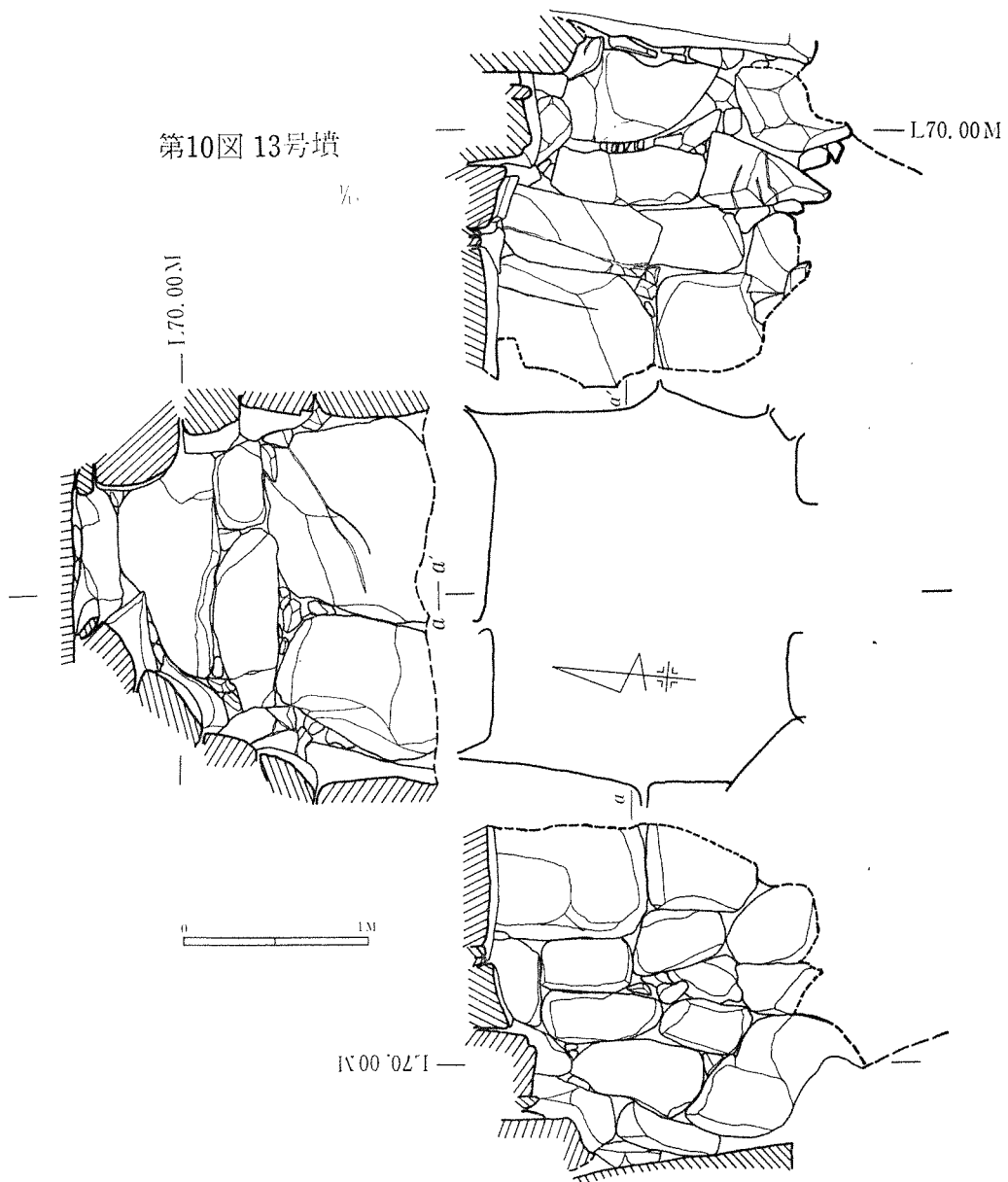
墳丘の状態は、玄室がほぼ完全に原形を保っていることもあり、良好である。ただ墳頂部は流出し、天井石が露出しているが、しっかりした墳丘裾線が確認できる。

石 室

玄室がよく原形を保っているのに対し、羨道の石材は崩壊して見あたらない。しかし、玄室床面のレベルより羨道のレベルが0.75mほど高くなっており、羨道最下部の石材及び閉塞石が埋没していることを推察できる。主軸はS 6° Eにとり、中央部で縦1.66m、横2.02mとやや横長であるが、本来は正方形に近いプランであつたろう。床面にはある程度土砂が流入しているが、現床面の標高は86.70mであり天井石まで中央で1.85mある。周壁はともに四段に構築され、栗石が少なく大ききの揃った石材を用い、持ち送りが使われている。特に左側壁のそれが非常に顕著であるのがこの古墳の特徴である。左側壁の場合、力石などの組み具合からいっても勢り出しではないだろう。この古墳の場合、玄室の規模に対して石材が大きい為に持ち送りが容易だったのであろう。

また天井石は1枚であり、墳頂に露出しているのでその規模を測ることができ、およそ1.2m²、厚さ0.8mの扁平な石材である。(植村敏文)

第10图 13号墳



第4章 後 論

私達考古学班の研究目的は、油山群集墳の解明と、研究の題材としている古墳等を含めた埋蔵文化財保護の2つである。油山群集墳の解明のために、分布調査による資料作成、図面作製及びその考察を行なっている。私達の研究も今回鳥越古墳群について終えたので、油山群集墳内の山崎古墳群、西油山古墳群、霧ヶ滝古墳群、駄ノ原古墳群、大谷古墳群、七隈古墳群（1基残存）、倉瀬戸古墳群、鳥越古墳群については一応ある程度まで達している。現在、残りの未踏査地域の分布調査（数、位置の確認、実測による古墳構造の把握）——鳥越E支群（仮称）に古墳3基を確認、内1基は複式——を行うことにより、すでにできあがっている資料と比較検討を行ない、今までに明らかにされていなかった油山群集墳の別の側面を引き出し、その解明に全力をそそいでいる。

しかし、私達がこうしている間にも開発に名を借りた文化財の破壊の波が押し寄せつつあるのである。現に早苗山古墳群、鳥越古墳群がある片江方面にも昨年（昭和51年）6月よりブルドーザー、ユンボなど大型土木機械が入って整備事業を行なっている。私達も数多くの須恵器片や砥石等を採集したのだが、遺構の確認ができなかったため工事を中止させるに及ぶことはできなかった。しかし、破壊が古墳群にかかれば、作成した資料による工事の中止や発掘調査の働きかけができるとともに、分布調査による古墳の分布状態、構造の究明などいろいろな資料の作製、保存はできるわけである。ここで誤解してはならないことは、これらの資料作製、保存が私達の研究のためだけと言うのではなく、私達考古学を学ぶ者も含めた一般国民の共有財産の資料として残し、群集墳の研究が行なわれるときにこれらの資料が十分生かされるということなのである。

私達考古学を学ぶ者は、その本来的な使命として埋蔵文化財保護をできる範囲内で訴え続けなければならない。分布調査やパトロールを絶えず行ない、資料を作製し、市や県教育委員会へ通報したり、またそれとは対照的に地域住民や一般市民、学生にそれらの持つ価値、重要性、残さねばならない理由、意義をわかってもらうような場を多く持って、私達が中心となって説明会などを開くことなどが必要である。

現代の流れに比例して文化財保護の気運が一部の人々だけに言われ、大多数の人々から忘れられているという事実を、私達はもっと真剣に考えなくてはならないのではないだろうか。

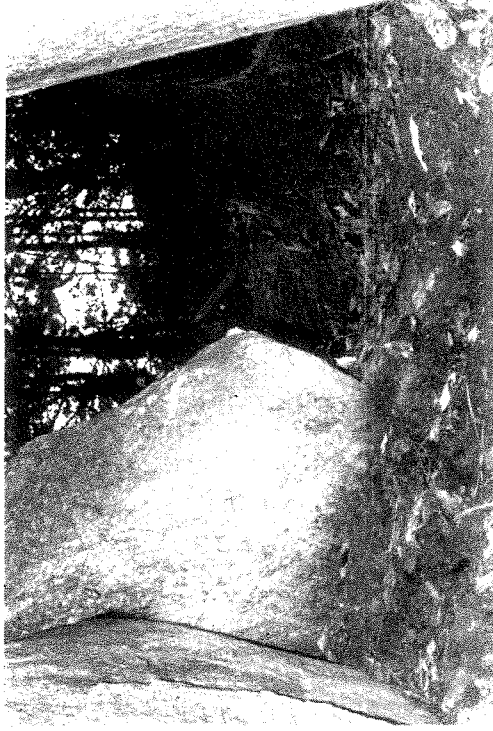
圖 版



1. 遠景〔油山（片江展望台）より鳥越古墳群を望む〕



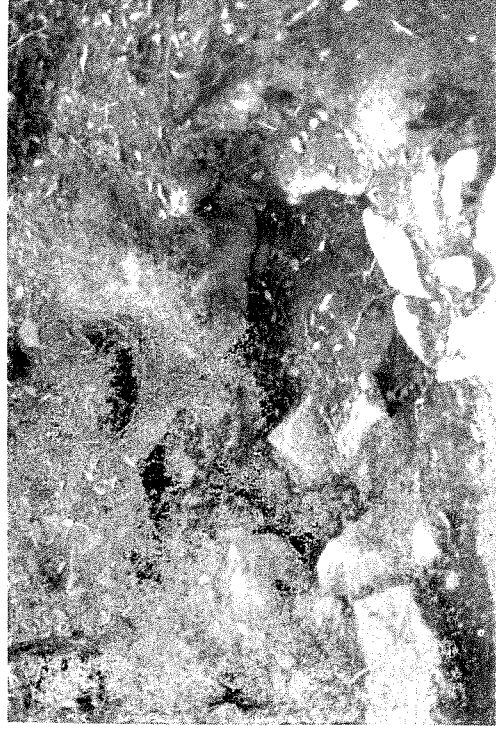
2. 1号墳〔前室より後室を望む〕



3. 1号墳〔後室より前室を望む〕



4. 2号墳〔南東側より玄室を望む〕



5. 3号墳〔東側より石室を望む〕



7. 5号墳〔南東側より玄室入口を望む〕



9. 5号墳〔後室の敷石乱状態（後室左側）〕



6. 4号墳〔北側より全景を望む〕



8. 5号墳〔前室より後室を望む〕



11. 7号墳〔南側より玄室を望む〕



13. 9号墳〔北側より玄室を望む〕



10. 6号墳〔南側正面より玄室を望む〕



12. 8号墳〔南側より玄室を望む〕



15. 11号墳〔南東側より全景〕



17. 13号墳〔玄門より玄室を望む〕



14. 10号墳〔南側より玄室を望む〕



16. 12号墳〔南東側より玄室奥壁を望む〕

福岡大学歴史研究部 考古学班

昭和52年8月1日

発行責任者	森	山	榮	治
編集責任者	赤	川	正	秀
編集委員	鈴	木	欣	也
	宮	原		卓
	森	田	雅	博

印刷 株式会社 博多印刷